Brief communication
［査読有り］ 短 報

学校における性教育がもたらす効果の検証
—避妊に対する態度や行動に着目した探索的分析—

An empirical study on effect of sex education in school on young people
—An exploratory analysis focusing on the effects on contraceptive behavior—

反橋 一憲
愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所

Kazunori Sorihashi
Institute for Gender and Women's Studies, Aichi Shukutoku University
2-9 Katahira, Nagakute-city, Aichi, 480-1197 Japan

キーワード：性教育，若者の妊娠，避妊行動，健康教育，青少年の性行動全国調査
Key words：Sex education, Pregnancy of youth, Contraception, Health education, Nationwide Survey of Sexual Behavior among Young People

抄録

本稿は，学校における性教育が効果を有するのか，つまり，若者の性行動に影響を与えるのかを検証した．具体的には，健康教育におけるKABモデルを参考にしながら，性教育を受けた経験と避妊に対する態度（妊娠への憂慮感），そして避妊行動の関係を分析した．その際，性教育への有用感も考慮した．

分析の結果，妊娠への憂慮感と避妊行動に対して学校での性教育が及ぼす効果は，高校生と大学生とで異なることが分かった．高校生の避妊行動には，学校で人工妊娠中絶を学習した経験が避妊への態度を媒介して間接的に影響を及ぼしている．また，高校生の避妊行動には性教育への有用感が直接的な影響を及ぼしている．一方で，大学生に対しては学校での性教育が効果を有しているとは言えなかった．大学生は学校での性教育などで得られた知識に限らず，これまで得てきた知識を意識的に参照しているとは限らないことが示唆される．以上より，避妊に対する態度や避妊行動を規定するメカニズムは，高校生と大学生で異なるという点が示された．

また，妊娠への憂慮感には避妊行動の有無が影響を及ぼし，逆に避妊行動の有無にも妊娠への憂慮感が影響を及ぼしている様子がうかがえる．さらに，高校生に限られた知見ではあるが，実際に避妊行動を選択した後に性教育が役に立ったと実感し，さらに知識を役立てて次の避妊行動を選択するようになる可能性もある．

1．問題の所在

日本における学校での性教育をめぐっては，日本の性教育がいまだに不十分であるという問題意識を背景にして，性教育の充実を求める主張がしばしば散見される．例えば，日本における学校での性教育は，道徳的な規範に比べて科学的な知識があまり重視されてこなかったと指摘される[1]．橋本ほか[2]や中澤[3]などは若者の性知識獲得状況を調査し，知識が不十分である点をもって，学校での性教育の問題点を指摘し，性教育のあるべき姿を論じる．また，土田・俣野[4]も若者を対象とした性行動調査の結果から，包括的性教育の必要性を主張する．このような，学校における性教育を充実させるべきという主張は先行研究にて数多くなされてきた．

しかし，これらの先行研究は，学校における性教育が効果を有しているかについては看過してきた．すなわち，実際に学校で性教育を受けた経験が若者の性行動に影響を与えているのかを十分には明らかにしていない．先行研究は，単なる知識

の定着度に着目する程度で，性教育を受けた経験が性行動に影響を与えているかには着目しきれていないのである．

学校での性教育を充実させるべきという主張は，学校における性教育に効果があることを暗に前提としているのではないか．そもそも，学校での性教育には，若者の性行動を規定するだけの効果があるのか，十分に解明されているとは言い難い．そこで本稿は，学校における性教育が効果を有するのか，つまり，若者の性行動に影響を与えるのかを検証する．具体的には，若者の性行動として避妊行動を取り上げ，若者の避妊についての意識や行動に性教育が影響を及ぼすのか検証する．

２．先行研究の検討と問いの設定

2.1.　若者の妊娠と避妊行動

若者（特に 10 歳代）の妊娠は，しばしばリスクと見なされる．例えば，奥田ほか[5]は 10 代の妊娠が想定外のもので，育児力の乏しさや，学業の中断，経済不安や社会的孤立などが問題点となり，パートナーも若年で「妊娠の継続や養育に問題を抱える場合も少なくない」と指摘する．妊婦が妊娠時に 20 歳未満だった場合，20 歳以上 35 歳未満の事例と比較して本人やパートナーが未就労である事例が多いなど母親の家庭環境の面で，あるいは妊娠中貧血の事例が多いなど周産期の予後の面でリスクが高いという報告もある[6]．さらには，若年時の妊娠が望まない妊娠として，人工妊娠中絶へとつながる点や教育機関からの中退などライフコースに影響する点もリスクとして挙げられる[7]．これらのリスクを回避するべく，学校教育では若者が望まない妊娠をしないことが重視される．例えば，厚生労働省「健やか親子 21（第 2 次）」では，「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」の一環として，10 歳代の人工妊娠中絶率の減少を目指し，学校において性に関する指導[注 1]を充実させることが方策の 1 つとして示されている[8]．本稿で若者の性行動として避妊行動を取り上げる理由は，以上のように性教育において若者の望まない妊娠が関心の 1 つとなるからである．

そこで，若者の避妊行動に関する先行研究を確認する．中澤[9]は性教育を受けた経験と避妊行動の関係を，土田[10]は性知識の定着度や性教育を受けた経験と避妊行動の関係を分析している．中澤や土田の知見は共通している．すなわち，男子は性知識を有していて，性教育を受けた経験があるほど避妊行動をする．対して女子は，正しい性知識を有していても，確実性の高い避妊行動につながっていない．

一方で，パートナーとの関係性が避妊行動を規定するという報告もある．俣野[7]はパートナーとのコミュニケーションと若者の避妊行動の関連を分析している．俣野によれば，パートナーと避妊について会話をする頻度が高いと女子の避妊の実行が促進される一方で，男子の避妊行動にはコミュニケーションの有無は影響を及ぼしていない．

以上のように，避妊行動に対しては，性教育を受けた経験あるいはパートナーとのコミュニケーションが影響を及ぼしているという知見がある．ただし，いずれの先行研究も性教育を受けた経験と，パートナーとのコミュニケーションを同時に検証しているわけではない．しかし，性教育がパートナーとのコミュニケーションを媒介して，間接的に避妊行動に影響を及ぼしていると想定することも可能である．すなわち，性教育を受けることでパートナーとコミュニケーションを取るようになり，避妊行動が促進される可能性もある．性教育と避妊行動の関係に関心のある本稿にとって，性教育を受けた経験が避妊行動に直接影響を及ぼすか否かは，コミュニケーションの有無を統制して確認しておくべきことである．

したがって性教育の効果を検証する本稿は，中澤や土田が着目した性教育を受けた経験や性知識の有無に，俣野が着目したパートナーとのコミュニケーションを統制変数として加味して，若者の避妊行動を規定する要因を解明することを試みる．

2.2.　知識と態度への着目

健康教育では，KAB（Knowledge, Attitude, Behavior）モデルが多用されてきた[11]．KAB モデルは，知識（knowledge）が態度（Attitude）を変容させて，行動に変化を生じさせるという発想である．つまり，「知識→態度→行動」という図式で示される．避妊行動の場合，避妊に関する知識が避妊に対する態度を変容させて避妊行動を生じさせると説明できる．すなわち，避妊に関する知識を有することで，避妊を選択する態度が生じるか否かに着目する．

避妊に対する態度とは何だろうか．例えば，「避妊をするべきである」というような避妊の是非に関する意識が挙げられよう．あるいは，「結婚前の

妊娠は避けるべきである」など，避妊を選択する（しない）具体的な理由のレベルでの意識も挙げられよう．いずれにせよ，避妊に対する態度とは避妊に対する肯定的／否定的な意識だと言える．KAB モデルに則れば，避妊に関する知識を有することで，避妊の是非や，避妊の理由となる妊娠への意識などの態度が規定されると説明できる[注 2]．

ところで俣野[7]は，避妊行動の規定要因としてパートナーとのコミュニケーション（＝行動）に着目しているが，避妊に対する態度を統制できていない．KAB モデルに着目するなら，パートナーとのコミュニケーションという行動も避妊に対する態度から影響を受けていると想定できる．すなわち，避妊を選択しようとするからこそ（＝態度），パートナーに対して避妊の意思を伝える（＝行動）という関係が成り立つのではないか．そのため，本稿での分析には避妊に対する態度を組み込むことにする．

KAB モデルに依拠する限り，知識の有無が態度を規定することになる．ただし，KAB モデルに対しては，単なる表層的な知識の学習だけでは態度を変容できないという批判が加えられている．例えば，尼崎・清水[11]によれば，大学生のコンドーム使用行動に関しては，知識と態度の間に有意な関係は見られない一方で，態度は行動に結びつくと報告される．本稿の関心に当てはめると，単なる避妊に関する知識の有無だけでは，避妊に対する態度の変容を説明できないということになる．そこで本稿が着目したいのが，「知識が役に立ちそうだ」という感覚である．吉森[12]は，性行動がまだ身近ではない中学生が性教育を受けて知識を学んでも，実感が湧かずに将来必要になる知識という程度の認識しか有さないと指摘する．この指摘を踏まえると，生徒は知識を学んだときに実感が湧くことで，知識が今すぐに役に立つものであると認識すると言える．この「役に立つものである」という認識が重要ではないか．知識が態度そして行動の変容をもたらすのだとすれば，単に避妊に関する知識を有しているだけでなく，避妊に関する知識が役に立ちそうだと実感することで，避妊に対する態度が変容し，避妊行動が選択されるのではないか．すなわち，知識の有無だけでなく，知識が役に立ちそうだという実感も必要になるのではないか．

また，実際に行動を選択することで態度を変化させることも想定できる．例えば，実際に避妊行動をとらずに性交を経験することで妊娠のリスクを実感し，その後の性交時では避妊を必ず選択するようになる事例もあるかもしれない．そうだとすれば，「態度→行動」という一方向的な関係ではなく，「行動→態度」も成立するという双方向的な関係を想定してもよいかもしれない．

さらに，若者の性の情報源には，学校での性教育のほかにもマスメディアや家族・友人なども挙げられる．中澤[13]では，例えば避妊方法の情報源として「友人・先輩」「インターネット」「付き合っている人」が挙げられている．このことは，学校での性教育以外にも性知識の情報源が存在することを意味する．したがって，単に知識の有無だけでなく，学校での性教育が他の情報源と比べて若者の性行動に影響を及ぼしているのかという点も考慮する必要がある．

ここまでの検討を踏まえると，「避妊に関する知識を有することで，避妊に対する態度が変容し，避妊行動が生じる」という単純な KAB モデル（知識→態度→行動）では避妊行動を説明しづらいことがうかがえる．まずは，単に知識を有しているか否かだけではなく，その知識が役に立ちそうだという実感も分析に組み込む必要がある．そして，知識の情報源によって態度や行動にも違いが生じるのかも踏まえる必要がある．特に，学校の性教育がもたらす効果を検証する本稿にとっては，学校から得た知識なのか，学校以外から得た知識なのかは重要な点である．さらには，「知識→態度⇔行動」というように，態度と行動が互いに影響を及ぼし合うのかについても考慮する必要がある．

2.3.　問いの設定

学校における性教育が若者の性行動に影響を与えるのか，避妊行動を取り上げて検証するために，ここまで先行研究と分析モデルを検討してきた．これらの検討を踏まえると，学校で学んだ知識の有無だけでなく，その知識が役に立ちそうだという実感が，避妊に対する態度を介して避妊行動を規定すると想定できる．ただし，本稿は知識の有無といっても性教育によって得られた知識に関心がある．そこで，学校での知識の学習経験があれば，性教育で学んだ知識を有しているとみなす[注 3]．

以上を踏まえて，本稿は最初に「性教育における学習経験は，避妊に対する態度に影響を及ぼす

のか」（知識→態度）という問いを検証する．具体的には，避妊に関する学習経験（＝知識）と性教育が役に立ちそうだという実感が，避妊に対する態度に対して影響を及ぼすのかという問いである．この問いを明らかにするために，避妊に対する態度を従属変数とした重回帰分析（分析 1）を行う．この時,「行動→態度」という関係も検証するため，避妊行動の有無も独立変数とするモデルも設定する[注 4]．

避妊に関する学習経験（＝知識）や知識が役に立ちそうだという実感と，避妊に対する態度との関係を検証してから，次に「性教育での学習経験は，避妊に対する態度を介して避妊行動に対して影響を及ぼすのか」（知識→態度→行動）という問いを検証する．具体的には，避妊に関する学習経験（＝知識）と，性教育が役に立ちそうだという実感が，避妊に対する態度を介して避妊行動に対して影響を及ぼすのかという問いである．この問いを明らかにするために，避妊行動の有無を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析（分析 2）を行う．

分析 1, 2 ともに高校生と大学生に分けて分析を行う．その理由は，性教育を受けている最中，あるいは受けたばかりの高校生と，性教育を受けてから時間が経過している大学生とで，性教育の効果が同様なのかを確かめるためである．大学生は高校生に比べると性教育を受けてから時間が経過しており，かつ交友関係が広がる分，学校以外から受け取る情報が多くなる．情報量が増える中で，学校における性教育の影響力は異なっているはずである．このような想定から，本稿では学校段階別に分析を行う．

３．使用するデータと変数

3.1.　使用するデータ

本稿が使用するデータは「第 7 回　青少年の性行動全国行動調査」（以下，本調査）である．本調査は日本性教育協会が 2011 年 10 月から 2012 年 2 月にかけて実施したものである．対象者は全国の中学生，高校生，大学生であり，層化三段法により抽出された．中学生 2504 名，高校生 2578 名，大学生 2600 名の計 7682 名から調査票が回収された[注 5]．

本調査を用いる利点は，単なる性知識獲得状況にとどまらず，学校で受けた性教育の学習状況が調査項目に含まれている点にある．すなわち，学校の授業で性に関する内容を学んだ経験や，学校で受けた性教育に対する評価（自身にとって役に立つかという有用感）を尋ねている．青少年に対して性行動と性に関する学習状況の双方を尋ねている本調査は，まさに本稿の目的に適っている．

ただし，本調査では避妊行動については高校生以上にしか尋ねていない．そのため，本稿では中学生は分析の対象に含めていない．また，2.3.で説明したように，本稿は高校生と大学生とに分けて分析を行う．ただし，避妊行動の有無に着目するため，これまで性交を経験した高校生または大学生のみが分析対象となる．そのため，高校生は 347 名，大学生は 755 名の計 1112 名が最終的な分析対象となっている．

3.2.　変数の設定

まず，従属変数を説明する．分析 1 の従属変数（および分析 2 の独立変数）は避妊に対する態度である．2.2.でも説明したように，避妊に対する態度とは，避妊に対する肯定的／否定的な意識である．ただし，本調査では性交時に避妊行動を必ずしもしない者，あるいは全くしない者に対してその理由を尋ねているが，避妊行動を毎回する者に対しては避妊に対する態度（価値観）を尋ねていない．そこで本稿では避妊に対する態度として妊娠への態度を便宜的に採用する．具体的には,「妊娠への憂慮感」を用いる．すなわち,「あなたは，自分がセックス（性交）することで妊娠する（妊娠させる）可能性について，気になりますか.」を使用し,「全然気にならない」が 1,「非常に気になる」が 4 になるように順に数値を割り当てた．この妊娠への憂慮感を避妊に対する態度とみなす．性交による妊娠を憂慮し，妊娠を回避するために避妊行動を選択する態度が生じるという関係を前提としている．

そして，分析 2 の従属変数（および分析 1 の独立変数）である「避妊行動の有無」は,「あなたはセックス（性交）をするとき，避妊を実行していますか.」を使用し,「いつもしている」に 1 を割り当てダミー変数化した．

次に，独立変数を説明する．学校での性教育が役に立ちそうだという実感は,「あなたは，いままでに学校の性に関する学習で教わったことがらが，自分にとって役に立つと感じましたか.」（性教育

への有用感）を使用し，「ぜんぜん役に立たないと感じた」が 1，「非常に役に立つと感じた」が 5 になるように順に数値を割り当てた．なお，「わからない」には 3 を割り当て，「性教育を受けたことはない」は欠損値として扱った．ただし，この項目は行動を選択する前の実感というよりも，行動を選択した後に知識が役立ったかの評価として扱うことが妥当かもしれない．すなわち，学校で学んだ知識が役に立ちそうだから避妊行動を選択したというよりも，実際に避妊行動を選択した後から「知識が役に立った」と実感したという解釈すべきかもしれない．このように，性教育への有用感を独立変数として使用することは，本稿の分析モデルとは時系列が異なる点で限界があるが，便宜上，知識が役に立ちそうだという実感としてみなす．

「学校における避妊の方法についての学習経験」（＝知識）は「あなたは，いままでに，次のような内容を学校で教わった覚えがありますか．」を使用し，「避妊の方法」を選択していたら 1 を割り当ててダミー変数化した．なお，妊娠への憂慮感（避妊に対する態度）や避妊行動には，妊娠のしくみや人工妊娠中絶の学習経験も影響を及ぼす可能性もある．そこで，「妊娠の学習経験」と「人工妊娠中絶の学習経験」もダミー変数化した．

「避妊方法の情報源」は「あなたは，次のことがらについて，どこから知識や情報を得ていますか．」の「避妊方法について」のうち，「学校（先生，授業や教科書）」（学校）のほかに「友人や先輩」，「付き合っている人」（交際相手），「インターネット」をそれぞれダミー変数化した[注 6]．

最後に，統制変数を説明する．まず，俣野に倣い，本稿でも「初交時の避妊」，「セックスをする際の意思疎通」，「避妊に関する会話」，「性知識の獲得状況」を統制変数として採用する．「初交時の避妊」は「初めてセックス（性交）を経験したとき，避妊を実行しましたか．」を使用し，「した」に 1 を割り当てダミー変数化した．「セックスをする際の意思疎通」（拒否したいときに伝えられるか）は「あなたは，セックス（性交）をしたくないとき，相手にその気持ちを伝えることができますか．」を使用し，「できる」に 1 を割り当て，ダミー変数化した．「避妊に関する会話」は「避妊について，相手と話をしますか」を使用し，「よくする」「ときどきする」に 1 を割り当て，ダミー変数化した．「性知識の獲得状況」は性知識を問う項目（全 6 問）の正答数の合計を計算して使用した．ただし，「わからない」「文章の意味がわからない」は誤答として扱った．

ところで，性教育への有用感は学校教育への信頼感とも関連している可能性がある．すなわち，学校教育に対する信頼感が強ければ，性教育で学んだ内容そのものに対する有用さを感じていなくとも盲目的に「役に立つ」と回答した可能性がある．本調査では学校教育への信頼感を直接は尋ねていないものの，学校の授業が楽しいか否かを尋ねている．そこで，「学校の授業へのイメージ」として「あなたにとって，現在の「学校の授業」のイメージはどのようなものですか．」を使用し，「楽しい」に 1 を割り当ててダミー変数化したものを設定した．このイメージを学校教育への信頼感の代替として使用する．さらに，本人の属性項目として性別，年齢を使用する．なお，本稿で使用する変数の記述統計は表 1 に示した．

4．分析結果

4.1.　妊娠への憂慮感の規定要因

分析 1（避妊に対する態度〔妊娠への憂慮感〕を従属変数とした重回帰分析）の結果は表 2 と表 3 のとおりである．それぞれモデル 1 は学校での性教育に関する項目（知識）による影響を検証するモデルであり，モデル 2 はモデル 1 に避妊やコミュニケーションの有無といった行動に関する変数を加えたモデルである．

まず，高校生について分析結果から読み取れることを述べる．モデル 1 に着目すると，人工妊娠中絶の学習経験に有意な正の効果が見られる．人工妊娠中絶について学習することで人工妊娠中絶のデメリットを学び，妊娠への憂慮感が引き起こされる可能性がある．

また，統制変数に着目すると，インターネットを情報源とする場合に妊娠への憂慮感が増す傾向にある．インターネットによる知識の影響については次の 2 つのメカニズムが想定される．1 つはインターネットによって妊娠に関する確かな知識を得て妊娠を心配するようになるというものである．もう 1 つは，インターネットでの不確かな知識に惑わされて，妊娠を心配するようになるというものである．なお，10%水準ではあるが，友人・先輩を情報源とする場合も，妊娠への憂慮感が増す可能性がある．このメカニズムもインターネッ

表 1．本稿で使用する変数の記述統計

	高校生				大学生			
	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値
男子ダミー	0.268	0.444	0	1	0.381	0.486	0	1
年齢	16.914	0.936	15	19	20.441	1.279	18	25
性知識の獲得状況	2.631	1.640	0	6	3.400	1.608	0	6
授業のイメージ	0.340	0.474	0	1	0.336	0.473	0	1
性教育への有用感	3.542	1.062	1	5	3.015	1.184	1	5
避妊方法の学習経験	0.905	0.294	0	1	0.832	0.374	0	1
妊娠の学習経験	0.925	0.264	0	1	0.907	0.290	0	1
人工妊娠中絶の学習経験	0.648	0.478	0	1	0.554	0.497	0	1
避妊方法の情報源（学校）	0.571	0.496	0	1	0.461	0.499	0	1
避妊方法の情報源（友人・先輩）	0.628	0.484	0	1	0.502	0.500	0	1
避妊方法の情報源（交際相手）	0.464	0.499	0	1	0.385	0.487	0	1
避妊方法の情報源（インターネット）	0.239	0.427	0	1	0.368	0.483	0	1
初交時の避妊	0.784	0.412	0	1	0.894	0.308	0	1
セックスをする際の意思疎通	0.746	0.436	0	1	0.728	0.445	0	1
避妊に関する会話	0.801	0.400	0	1	0.775	0.418	0	1
妊娠への憂慮感	3.542	0.693	1	4	3.640	0.583	1	4
避妊の有無	0.677	0.468	0	1	0.804	0.397	0	1
N	347				755			

表 2．妊娠への憂慮感を従属変数とした重回帰分析の結果（高校生）

	モデル 1			モデル 2		
	B	S.E.	β	B	S.E.	β
男子ダミー	-0.007	0.088	-0.004	-0.042	0.087	-0.027
年齢	-0.021	0.040	-0.028	-0.015	0.039	-0.020
性知識の獲得状況	0.027	0.024	0.063	0.019	0.023	0.046
授業のイメージ	-0.163	0.076*	-0.112	-0.173	0.075*	-0.119
性教育への有用感	0.050	0.035	0.077	0.013	0.035	0.019
避妊方法の学習経験	-0.042	0.135	-0.018	0.000	0.132	0.000
妊娠の学習経験	-0.163	0.148	-0.062	-0.163	0.146	-0.062
人工妊娠中絶の学習経験	0.247	0.087**	0.171	0.223	0.085**	0.154
避妊方法の情報源（学校）	0.100	0.076	0.071	0.089	0.074	0.063
避妊方法の情報源（友人・先輩）	0.147	0.077+	0.102	0.141	0.075+	0.099
避妊方法の情報源（交際相手）	0.072	0.077	0.052	0.023	0.077	0.017
避妊方法の情報源（インターネット）	0.205	0.087*	0.126	0.197	0.085*	0.122
初交時の避妊				-0.007	0.091	-0.004
セックスをする際の意思疎通				0.148	0.085+	0.093
避妊についての会話				0.271	0.095**	0.156
避妊の有無				0.217	0.080**	0.147
定数	3.503	0.721***		3.103	0.707***	
N	347			347		
調整済み R^2	0.072			0.124		

+:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001（以下同様）

トを情報源とする場合と同様に，正確あるいは不正確な情報を得るという 2 つのパターンが想定される．

一方，授業のイメージには有意な負の効果が見られる．すなわち，授業のイメージが楽しくない高校生ほど，妊娠への憂慮感が増していることを意味する．本稿では授業のイメージを学校教育への信頼感を意味する変数として用いているが，学校に馴染めているか否かを示す変数だとも言える．授業のイメージが楽しいとは言えない生徒を学校に馴染めていないと措定するならば，学校に馴染めていない生徒ほど性交を経験して妊娠のリスクが高まるため，憂慮感が増すと言えるかもしれない．そこで，分析対象を高校生に限定して授業に対するイメージと性交経験でクロス集計表を作成し，カイ二乗検定を実施したところ，0.1%水準で有意であり，調整済み残差を確認しても「楽しくない」「どちらでもない」を回答した高校生がより性交を経験していた（図表は省略）．そのため，推測の域を出ないが，学校に馴染めず逸脱傾向にある生徒が性交を経験する分，憂慮感を高める可能性がある．

そして，モデル 2 に着目すると，モデル 1 で有意な効果が見られた変数には引き続き有意な効果が見られた．さらに，新たに投入した変数では，避妊についての会話と避妊の有無に有意な正の効果があり，セックスをする際の意思疎通にも 10%水準で正の効果が見られた．避妊行動を選択することが避妊に対する態度に影響を及ぼしているようである．

次に，大学生について分析結果から読み取れることを述べる．モデル 1 を参照すると，大学生は高校生と違って学校での性教育に関する変数に有意な効果が見られない．有意な効果が見られるのは，男子ダミーと性知識の獲得状況であり，男子ダミーは負の効果を，性知識の獲得状況は正の効果を有する．男子学生よりも妊娠の当事者となり得る女子学生の方が，より妊娠を憂慮しているようである．そして，性知識の有無が態度を規定すると言えるようである．ただし，学校での学習経験や情報源としての学校には有意な効果が見られないことから，学校での性教育による知識だとは必ずしも言えない．

そして，モデル 2 を参照すると，モデル 1 で有意な効果を有していた変数には引き続き有意な効果が見られた．新たに投入した行動に関する変数も，避妊についての会話と避妊の有無に有意な正の効果が見られた．高校生と同様に，大学生にお

表 3．妊娠への憂慮感を従属変数とした重回帰分析の結果（大学生）

	モデル 1			モデル 2		
	B	S.E.	β	B	S.E.	β
男子ダミー	-0.108	0.047 *	-0.090	-0.096	0.046*	-0.080
年齢	-0.010	0.017	-0.021	-0.003	0.017	-0.007
性知識の獲得状況	0.037	0.014 **	0.102	0.031	0.013*	0.086
授業のイメージ	0.067	0.045	0.055	0.045	0.044	0.036
性教育への有用感	0.021	0.019	0.042	0.018	0.018	0.037
避妊方法の学習経験	-0.078	0.063	-0.050	-0.076	0.062	-0.049
妊娠の学習経験	0.057	0.078	0.028	0.046	0.077	0.023
人工妊娠中絶の学習経験	0.008	0.045	0.007	0.007	0.045	0.006
避妊方法の情報源（学校）	0.026	0.045	0.022	0.032	0.044	0.027
避妊方法の情報源（友人・先輩）	0.001	0.043	0.001	-0.006	0.043	-0.005
避妊方法の情報源（交際相手）	0.025	0.046	0.021	0.005	0.046	0.004
避妊方法の情報源（インターネット）	0.087	0.045＋	0.072	0.065	0.044	0.054
初交時の避妊				0.098	0.071	0.052
セックスをする際の意思疎通				-0.048	0.047	-0.037
避妊についての会話				0.235	0.050***	0.168
避妊の有無				0.165	0.055**	0.113
定数	3.620	0.371 ***		3.181	0.374***	-0.080
N	755			755		
調整済み R^2	0.021			0.063		

いても避妊行動を選択することが避妊に対する態度に影響を及ぼしているようである．

以上のように，妊娠への憂慮感に着目したとき，高校生と大学生とで学校での性教育による影響が異なっていることがわかる．人工妊娠中絶の学習経験が有意な効果を持つことから，高校生には学校での性教育が影響を及ぼすと言える．一方，大学生には学校での性教育が影響を及ぼすとは言えない．もっとも大学生は，性知識を有していれば憂慮感が増すようであるが，その知識が学校での性教育によって得られたものとは断言できない．そして，高校生・大学生ともに避妊に関する行動が避妊への態度に影響を及ぼしている様子がうかがえた．

4.2.　避妊行動の規定要因

分析 2（避妊行動の有無を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析）の結果は表 4 のとおりである．なお，モデル 1 は避妊に対する態度（妊娠への憂慮感）を加えずに性教育の効果を検証するモデル（知識→行動）であり，モデル 2 は避妊に対する態度を加えて性教育の効果を検証するモデル（知識，態度→行動）である．

妊娠への憂慮感と同様に，避妊行動に対する性教育の効果は高校生と大学生で異なるようである．高校生については具体的な学習経験が効果を有しているわけでないが，性教育への有用感が有意な正の効果を有する．知識が役に立ちそうだという実感が避妊行動を選択させる可能性がある．一方，大学生については知識に関する変数に有意な効果は見られなかった．

そして，態度を投入したモデル 2 に着目すると，高校生と大学生ともに妊娠への憂慮感が有意な正の効果を有している．妊娠への憂慮感が避妊行動に影響を及ぼしており，妊娠への憂慮感が大きいほど避妊行動を選択するようになる．態度が行動を規定していると言えよう．ただし，態度を投入したモデル 2 においても，高校生における性教育への有用感は有意な効果を引き続き有している．このことから，高校生においては態度を統制した

表 4．避妊行動の有無を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析の結果

	高校生						大学生					
	モデル 1			モデル 2			モデル 1			モデル 2		
	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)
男子ダミー	0.578	0.322 +	1.783	0.619	0.328 +	1.858	0.394	0.221 +	1.483	0.454	0.225 *	1.575
年齢	-0.052	0.139	0.950	-0.042	0.140	0.958	-0.158	0.079 *	0.854	-0.156	0.080 +	0.856
初交時の避妊	1.489	0.295 ***	4.433	1.493	0.298 ***	4.452	1.929	0.262 ***	6.881	1.881	0.265 ***	6.559
性知識の獲得状況	-0.018	0.081	0.982	-0.027	0.082	0.973	-0.018	0.064	0.982	-0.029	0.065	0.971
授業のイメージ	0.059	0.267	1.060	0.180	0.276	1.198	0.318	0.218	1.374	0.296	0.220	1.345
性教育への有用感	0.298	0.122 *	1.347	0.295	0.124 *	1.344	-0.041	0.087	0.960	-0.052	0.088	0.950
避妊方法の学習経験	0.091	0.453	1.096	0.092	0.463	1.097	-0.460	0.315	0.631	-0.432	0.318	0.649
妊娠の学習経験	0.296	0.520	1.345	0.384	0.526	1.467	0.494	0.349	1.639	0.485	0.353	1.624
人工妊娠中絶の学習経験	-0.053	0.300	0.948	-0.184	0.309	0.832	-0.281	0.213	0.755	-0.278	0.214	0.757
避妊方法の情報源（学校）	-0.006	0.263	0.994	-0.051	0.266	0.951	-0.158	0.209	0.853	-0.170	0.210	0.844
避妊方法の情報源（友人・先輩）	0.024	0.263	1.024	-0.057	0.268	0.944	-0.266	0.203	0.766	-0.254	0.205	0.776
避妊方法の情報源（交際相手）	-0.389	0.273	0.678	-0.402	0.276	0.669	0.159	0.216	1.172	0.148	0.216	1.159
避妊方法の情報源（インターネット）	-0.081	0.304	0.923	-0.199	0.312	0.819	0.374	0.216 +	1.454	0.336	0.218	1.400
セックスをする際の意思疎通	0.357	0.292	1.428	0.260	0.297	1.297	0.268	0.214	1.308	0.291	0.216	1.337
避妊に関する会話	0.318	0.321	1.374	0.194	0.328	1.215	0.137	0.235	1.147	0.008	0.242	1.008
妊娠への憂慮感				0.509	0.189 **	1.663				0.464	0.161 **	1.590
定数	-1.303	2.522	0.272	-2.980	2.611	0.051	2.786	1.746		1.256	1.843	3.511
N		347			347			755			755	
-2 対数尤度		392.074			384.563			672.768			664.667	
Nagelkarke R^2		0.168			0.194			0.149			0.165	

としても，知識が役に立ちそうだという実感による直接的な影響が残っているとも言える．

一方，統制変数に着目すると，高校生と大学生ともに初交時の避妊が有意な正の効果を有している[注7]．また 10%水準ではあるが，男子ダミーも高校生と大学生ともに有意な正の効果がある（大学生のモデル 2 では 5%水準）．女子よりも男子が避妊行動を選択する様子がうかがえる．また，大学生のモデル 1 では年齢が有意な負の効果を有しており，モデル 2 でも 10%水準で有意である．年齢が上がるほど避妊行動を採らなくなる様子がうかがえる．さらに大学生のモデル 1 に限れば，10%水準で避妊方法の情報源（インターネット）も大学生の避妊行動に影響を及ぼしている可能性がある．

以上より，少なくとも高校生では，具体的に妊娠や避妊方法について学んだ経験が避妊行動に影響を及ぼしているわけではないが，性教育で学んだ知識が役に立ちそうだという実感は避妊行動に影響を及ぼしている．一方で大学生においては，妊娠や避妊方法についての具体的な学習経験も，性教育で学んだ知識が役に立ちそうだという実感も避妊行動に影響を及ぼすわけではない．そして，高校生と大学生ともに，妊娠への憂慮感（態度）は避妊行動に影響を及ぼしているようである．

５．分析結果の要約と考察

分析 1 と 2 より，妊娠への憂慮感と避妊行動に対して学校での性教育が及ぼす効果は，高校生と大学生で異なることが分かった．高校生に対しては妊娠への憂慮感には性教育での学習経験が，避妊行動の有無には性教育で学んだ知識が役に立ちそうだという実感が，それぞれ効果を有しているようである．一方で，大学生に対しては学校での性教育が効果を有しているとは言えなかった．

高校生の避妊に対する態度には，避妊の学習経験そのものよりも，人工妊娠中絶の学習経験が有意な効果を有している．4.1.でも述べたように，人工妊娠中絶について学習することで人工妊娠中絶のデメリットを学び，妊娠への憂慮に繋がっている可能性がある．この点からは，避妊について直接学ぶだけでなく，避妊をしなかった場合に生じ得る結果も学ぶことが重要だと示唆される．避妊をしないと望まない妊娠をしてしまう場合があり，その結果，人工妊娠中絶が必要となり心身に大きな負担が生じるという一連の過程を想像することで，避妊の必要性を実感できるのではないだろうか．

そして，その避妊に対する態度が実際の避妊行動を規定している．そのため，学校での性教育を受けた経験は避妊への態度を媒介して間接的に避妊行動に影響を及ぼしている可能性がある．もちろん，本稿の分析から実証的に媒介関係を示せたわけではない[注8]．そのため，今後の検証を要する仮説であることは言うまでもない．

また，高校生の避妊行動には性教育への有用感が直接的な影響を及ぼしている．性教育で何かを具体的に学んだ経験が影響を及ぼしているわけではないが，学校での性教育で学んだ知識が役に立ちそうだという実感が，避妊行動に影響を及ぼすのかもしれない．そうだとすれば，性教育で学んだ内容が実際の行動に役に立ちそうだという実感を生徒に生じさせることが，性教育の効果をより高めることにつながるかもしれない．性教育への有用感は性教育の効果を検討する際に考慮するべきだと示唆される．

また，高校生にとっては学校以外の情報源も重要である．高校生の避妊に対する態度にはインターネットを情報源とすることが影響を及ぼしており，さらには友人・先輩を情報源とすることも態度に影響を及ぼしている可能性もある．学校以外の情報源による確かな知識によって妊娠を正しく恐れるようになっているのか，あるいは不確かな知識によって不安に陥っているかは判断できないが，少なくとも学校以外で性知識を入手することも態度に影響を及ぼすようである．特に，インターネットで得られる知識の影響は無視できない．中澤[3]は学校での性教育が性知識に貢献していると指摘するが，同時にインターネットを避妊の情報源とすることも性知識に貢献しているとも指摘している．インターネットは学校に比肩する性の情報源であり，態度に影響を及ぼしている．

もっとも，情報源と妊娠への憂慮感との間にも逆の因果関係が成立する可能性もある．すなわち，妊娠を憂慮して学校以外の情報源からも知識を入手するという関係が生じている可能性もある．データの制約上，因果関係をこれ以上特定することは難しい．しかし，いずれにせよ，高校生には学校やインターネットなどから情報を得ようとする姿勢がある様子が見て取れる．

一方で，大学生に対しては学校での性教育が効果を有しているとは言えなかった．しかし，大学

生の妊娠への憂慮感は性知識の獲得状況による影響を受けているようで，性知識を有するほど妊娠への憂慮感が増す傾向が見られた．先行研究によれば，学校での性教育は性知識の獲得に一定の役割を果たしているとされる．例えば，中澤[13]では，学校の性教育が「友人に聞くことができない青少年にとって重要なリソース」だと指摘される．同様に中澤[3]でも，学校は「生徒の事情にかかわらず（中略）性知識に貢献している」と言われる．特に中澤[3]は，性知識の獲得状況を従属変数とした重回帰分析の結果，学校を避妊の情報源とすることが性知識に貢献していることを指摘している．このような，学校での性教育は知識獲得に効果があるという知見を前提とすれば，性教育は態度を介して行動に影響を及ぼすとも言えなくはない．

とはいえ，大学生は高校生と違い，学校での具体的な学習経験や性教育への有用感から直接影響を受けているわけではない．本稿は 2.2.において，大学生は性教育を受けてから時間が経過しており，かつ交友関係が広がる分，学校以外から受け取る情報が多くなるという想定を立てた．この想定通りだとすれば，高校生と比べて大学生は受け取ってきた情報が多い分，より多くの知識が蓄積され，学校での性教育を通して得られた知識の影響力は相対的に小さくなっているだろう．大学生にとって学校での性教育で得られた知識は，他の情報源から得られた知識に埋もれてしまうことで，性行動に影響を及ぼすには至らない可能性がある．

しかし，大学生に対しては学校以外の情報源も有意な効果を有していない．このことから，大学生は学校での性教育などで得られた知識に限らず，他の情報源からの知識も含めて，これまで得てきた知識を意識的に参照しているとは限らないと示唆される．換言すれば，性教育などを通して得られた知識は「当たり前のもの」として認識されており，とりわけ意識的に思い返すものではないのかもしれない．学校やインターネットなどから情報を得ようとする姿勢が見て取れる高校生とは対照的である．いずれにせよ，避妊に対する態度や避妊行動を規定するメカニズムは，高校生と大学生で異なるという点が示された[注 9]．

次に，分析 1 と分析 2 から，妊娠への憂慮感には避妊行動の有無が影響を及ぼし，逆に避妊行動の有無にも妊娠への憂慮感が影響を及ぼしている様子がうかがえる．KAB モデルに基づく「態度→行動」のみならず，「行動→態度」という図式も成り立つかもしれない．すなわち，態度も行動に規定されており，態度と行動が相互に影響を及ぼし合っているのではないか．

こうしてみると，行動を単なる従属変数としてだけではなく，独立変数としてもみなす必要が出てくる．特に，行動を一度選択することがその後の行動選択にも影響を及ぼす．先行研究[7]や本稿で確認してきたように，初交時に避妊を選択することがその後の避妊行動に影響を及ぼす．また，本稿では，「いままでに学校の性に関する学習で教わったことがらが，自分にとって役に立つと感じましたか．」（性教育への有用感）という項目を，知識が役に立ちそうだという実感として用いた．しかし，3.2.でも説明したように，この項目は実際に行動を選択した後に知識が役に立ったかどうかの評価を示す項目とも解釈できる．そうだとすれば，分析 2 で「性教育への有用感」に有意な効果があった高校生に限られた知見になるが，実際に避妊行動を選択した後に性教育が役に立ったと実感し，さらに知識を役立てて次の避妊行動を選択するようになるとも言える．このように，実際に選択した行動がその後の行動にも影響を及ぼしている可能性がある．

６．今後の課題

以上のような知見は得られたものの，本稿は多くの課題を積み残すこととなった．最初に，本稿は性交経験のあるものに分析対象を限定したため，十分なサンプルサイズを確保できていない点が課題として挙げられる．十分なサンプルサイズを確保して分析する必要がある．

また，KAB モデルを下敷きにした本稿のモデルによる因果関係の説明が適切か判断できていない点も課題である．本稿で説明した因果関係とは逆の因果関係が成立しないか，今後検討する必要がある．特に，態度が行動を規定するのか，あるいは行動が態度を規定するのかという点について，本稿では両者を想定した分析を実施し，相互に因果関係があると論じた．たが，時系列を明確にしていないので，相互に因果関係があるか否かは断言できない．時系列を明確にして因果関係を検証する必要がある．時系列を考慮するために，縦断的な調査も有用であろう．

上記のようなデータや分析手法による課題を踏

まえつつ，今後の分析課題をいくつか提示する．まず，性別によって性教育が及ぼす効果は異なるのかという点が挙げられる．中澤[9]や土田[10]，俣野[7]は避妊行動のメカニズムにおける性差の存在を指摘した．そうだとすれば，性教育が及ぼす効果も違うのか．

また，高校生と大学生で避妊に対する態度や行動のメカニズムが異なる点が示されたが，大学生におけるメカニズムの解明にはさらなる検討が必要だろう．特に，避妊への態度を従属変数とした分析 1 の調整済み決定係数に着目すると，モデル 1 とモデル 2 ともに高校生より大学生の方が説明力は小さい．大学生の避妊に対する態度や行動を決定するメカニズムを解明するには，分析モデルのブラッシュアップが求められる．

次に，避妊行動以外の性行動にも着目する必要がある．例えば，避妊行動は性交を経験していることを前提とするが，そもそも性交をするか否かという選択に対しても，性教育は効果を有するのか．あるいは，援助交際といった買春行為などの逸脱行為を抑制する効果があるのかという点も検討に値するだろう．

さらに敷衍すれば，性教育の効果を検証する際に単に行動ではなく，態度にどのような変化が生じたかに着目する必要があろう．本稿の分析結果からは，性教育は態度を介して行動に影響を及ぼすことが示唆された．性教育が態度を変容させ，その結果として性行動に変容を及ぼす一連の過程を明らかにしていく必要がある．

そして，子どもの家庭環境（社会階層など）によって，性教育の効果は異なるのかも，今後の検討課題となる．家庭環境によって性行動に違いが生じることが指摘されている[14][15]．また，家庭における性教育を対象とした研究も少しずつなされてきている[16]．家庭で受ける性教育と学校で受ける性教育による影響の違いも検討することが求められよう．

謝辞

二次分析に当たり，東京大学社会科学研究所附属社会調査･データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「第 7 回青少年の性行動全国調査（JASE　SSJDA 版），2011」（青少年の性行動全国調査研究会）の個票データの提供を受けた．

注

[注 1] 「健やか親子（第 2 次）」では「性教育」ではなく「性に関する指導」という語句が用いられる．そもそも，「健やか親子（第 2 次）」に限らず，国は「性教育」という語句を正式には使用していない．ただし，本稿では「性教育」という語句を用いることにする．

[注 2] 「避妊に対する態度」の説明は，社会意識論における「態度」の定義[17]を参考にした．

[注 3] 本稿で用いるデータには性知識をクイズ形式で問う項目があるので，知識の有無は把握できる．だが，その知識が学校による教育で得られたものかをデータから判断することはできない．そのため，学校での学習経験の有無を便宜的に「性教育で得られた知識の有無」とみなす．もちろん，単に学習経験があるからといって正確な知識が身についているとは限らず，学んだ知識を忘れている可能性も否定できない．そこで，避妊方法，妊娠，人工妊娠中絶の各学習経験によって，性知識の獲得状況が異なるのかを t 検定にて確認した（使用する変数の詳細は本文 3.2.を参照されたい）．その結果，いずれも学習経験があるほど正答数が多い，つまり，正確な知識を身につけていることが分かった（図表は省略）．したがって本稿では，学習経験があれば正確な知識を有しているとみなす．

[注 4] 本来は時系列を考慮すべきであるが，本稿では質問項目の制約から，調査時点での行動と態度を分析に用いる．この点は今後の課題である．

[注 5] 本調査の詳細は，日本性教育協会による報告書[18]を参照されたい．

[注 6] 分析の煩雑さを回避するため，学校以外の情報源は問 16(d)の有効回答ケースの中で避妊方法の情報源として回答されているものが多かったものを選択した．

[注 7] なお，初交時の避妊を従属変数とし，モデル 2 の変数に統制変数として初交時の年齢を加えた二項ロジスティック回帰分析を行った（図表は省略）．高校生に関しては「セックスをする際の意思疎通」に 10%水準で有意な正の効果が見られた．一方，大学生に関しては初交年齢が 0.1%水準で，人工妊娠中絶の学習経験と友人・先輩を避妊の情報源とすることが 5%水準で，それぞれ有意な正の効果を有していた．本調査は初交時ではなく調査時点での性行動・意識を尋ねているので直ちには判断できないが，初交時の避妊には学校での性教

育が影響を及ぼしているようである．
[注 8] 例えば，分析 2 において，性教育を受けた経験がモデル 1 では有意な効果を有していたが，モデル 2 では学習経験が有意な効果を持たず，代わりに妊娠への憂慮感が有意な結果を持つとするならば，媒介関係があると実証的に言える．
[注 9] ただし，[注 7]で示したように，大学生も初交時の避妊には性教育を受けた経験が影響を及ぼしている．あくまでも推測の域を超えないが，初交は性教育の影響を受けているかもしれない．だが，その後交友関係が広がり，受け取る情報量も多くなる分，性教育の影響を受けなくなっていくのかもしれない．

引用文献

[1] 田代美江子．敗戦後日本における「純潔教育」克服の課題―未だなされていない性教育への転換．同時代史研究．2018, 11, p.35-51.
[2] 橋本紀子ほか. 日本の中学校における性教育の現状と課題.「教育とジェンダー」研究. 2011, 9, p.3-20.
[3] 中澤智惠．“知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題”．日本性教育協会編．「若者の性」白書―第 8 回　青少年の性行動全国調査報告．小学館，2019, p.89-104.
[4] 土田陽子ほか．“青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性”．日本性教育協会編．「若者の性」白書―第 8 回　青少年の性行動全国調査報告．小学館，2019, p.129-146.
[5] 奥田直貴ほか．若年妊娠のリスクとメリット．ペリネイタルケア．2008, 27(7), p.21-24.
[6] 植田陽子ほか. 臨床経験　当院における若年妊娠の現状．臨床婦人科産科．2020, 74(11), p.1183-1187.
[7] 俣野美咲. 青少年の避妊行動に及ぼすパートナーとのコミュニケーションの影響．社会学年報．2019, 48, p.129-137.
[8]「健やか親子 21」の最終評価等に関する検討会．“「健やか親子 21（第 2 次）」について　検討会報告書―「すべての子どもが健やかに育つ社会の実現」に向けて”．https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000045655.pdf,（参照 2022-12-13）.
[9] 中澤智惠．“性教育・性情報源と性知識および避妊に対する態度形成”．日本性教育協会編．「若者の性」白書　第 6 回青少年の性行動全国調査報告．小学館，2007, pp.145-174.
[10] 土田陽子．“高校生・大学生の避妊に関する意識と行動―避妊行動の分化に着目して”．日本性教育協会編．「若者の性」白書―第 7 回　青少年の性行動全国調査報告．小学館，2013, p.121-139.
[11] 尼崎光洋ほか．性感染症予防における知識と態度がコンドームの使用に及ぼす影響―コンドームの使用に対する態度尺度の開発と KAB モデルの検証．学校保健研究．2008, 50, p.89-97.
[12] 吉森容子．性教育の授業をうけている中学 3 年生が体験する内的世界．学校保健研究．2018, 60, p.166-178.
[13] 中澤智惠．“性情報源として学校の果たす役割―性知識の伝達という観点から”．日本性教育協会編．「若者の性」白書―第 7 回　青少年の性行動全国調査報告．小学館，2013, p.177-198.
[14] 石川由香里．“青少年の家庭環境と性行動―家族危機は青少年の性行動を促進するのか”．日本性教育協会編．「若者の性」白書―第 7 回　青少年の性行動全国調査報告．小学館，2013, p.63-80.
[15] 苫米地なつ帆．“家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか”．日本性教育協会編．「若者の性」白書―第 8 回　青少年の性行動全国調査報告．小学館，2019, p.69-85.
[16] 林雄亮．“若者の性行動・性意識の実態と課題―「青少年の性行動全国調査」研究の新展開へ向けて”．林雄亮ほか編．若者の性の現在地―青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える．勁草書房，2022, p.3-23.
[17] 神林博史．“社会意識の社会学”．日本数理社会学会監修．計量社会学入門―社会をデータでよむ．世界思想社，2015, p.196-207.
[18] 日本性教育協会編．「若者の性」白書―第 7 回青少年の性行動全国調査報告．小学館，2013.

Abstract

This article examines whether sex education influences the sexual behavior of young people. Specifically, we analyzed the influence of sex education on the choice of contraceptive behavior by young people, focusing on the perceived usefulness of sex education and concern about pregnancy, with reference to the KAB model of health education.

The results suggest that the effects of school sex education on concern about pregnancy and contraceptive behavior differed between high school and undergraduate students. The high school students' contraceptive behavior was indirectly influenced by their experience of abortion education in school, mediated by their attitudes toward contraception. The high school students' contraceptive behavior was also directly influenced by their perception of the usefulness of sex education. For undergraduate students, however, sex education at school was not effective. Undergraduate students do not always consciously refer to the knowledge they have acquired so far, not limited to the knowledge obtained through sex education in school.

In addition, the concern about pregnancy had an effect on contraceptive behavior, and vice versa. Furthermore, after high school students actually choose a contraceptive behavior, they might realize the usefulness of sex education and then use their knowledge to choose their next behavior.

（受付日：2023 年 1 月 12 日，受理日：2024 年 1 月 11 日）

反橋　一憲（そりはし　かずのり）
現職：愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所助教

早稲田大学大学院教育学研究科修士課程修了，同博士後期課程中途退学.
専門は教育社会学．性教育を研究テーマとしており，主に保健体育科教科書における性に関する内容（性感染症や男女交際など）の記述を分析している．